

巻 頭 言

コロナ禍の1年を振り返って

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、私たちの日常を大きく変えました。不要不急の外出を避けることから始まり、感染予防のために生活様式の変更を迫られました。

また、多くの大学と同様、本学においても教育のICT化が一気に進みました。授業は対面で行うのが当たり前で、オンラインなど自分には無関係の遠い世界の話と思っていた私ですら、もはやオンライン授業は、授業形態の1つの選択肢となり、抵抗を持たずに行うようになりました。

緊急事態宣言の発出により、本学では、昨年4月には授業を開始できませんでしたが、5月の連休明けから比較的スムーズにオンライン授業を開始することができました。これには、学内の関係者に休日返上でシステムを整えていただいたことに加え、老いも若きもすべての学部教員がZoom、Google FormやClassroomなど、教育に活用できるツールを次々と短期間で習得し、授業の準備を整えたことが大きく貢献したと考えます。FD委員会では、教員の要望に応え、オンライン授業に関わる研修を企画・実施し、好評を博しましたし、急遽、学部内に組成された遠隔授業サポート委員会の構成員である比較的若い世代の教員たちの活躍も目覚ましいものがありました。有事の時こそ、組織の力が試されることを実感するとともに、よりよい教育を提供しようとする学部教員の矜持にふれる機会となりました。

本学では、2021年度も基本的に対面授業を行いつつ、感染拡大状況により、オンライン授業の併用や切り替えが予定されています。また、2021年度の入学生から、全学部でPC必携になりました。これからも、ICTを活用した教育が進んで行くことでしょう。

コロナ禍が私たちにもたらしたものは、悪いことばかりではないと考える一方で、小児看護学を専門領域とする私は、子どもの発達に与える負の影響を危惧しています。コロナ前の生活が長く、すでに成人になっている私たちにとって影響は少ないと思えることでも、発達途上にある子どもにとって、感染予防を最優先とする生活様式が日常になってしまうことが気になります。例えば、マスクで顔の半分を覆い、表情が見えにくい状態での他者とのやり取りでは、相手の感情や意図を読み取ることが難しく、子どものコミュニケーション能力の獲得の妨げになります。集団生活の中で、できるだけ距離を取って遊ぶことや、「黙食」が奨励されていることは、子どもが他者と良い関係を作り、社会性を身につけていく上で好ましい環境ではありません。子どもの健やかな発達には他者との親密な接触を通した楽しい経験の蓄積が必要なのです。

生命を最優先にした行動をすべきであると頭で理解していても、子どもの発達を考えると、このようなジレンマを感じてしまう私の願いは、皆さんと同様、1日も早いコロナの終息です。

最後になりますが、昨年度の開催を延期した看護福祉学部学会第17回学術大会は、今年度、ZoomによるWEB開催という新たな方式で行われます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

看護福祉学部学会理事長 三国 久美